

コスタリカを旅して

## リンコングランデ小学校訪問

齋藤 直子

### 「オラ」と挨拶しながら教室へ

旅の一日目は、リンコングランデ小学校訪問です。現地ガイドの五十嵐さんより「貧困地区にある学校ですので、バスから降りたら手荷物に注意してください。」という話を聞き、緊張しながら学校へ。

児童数千八百人の学校だということなので、日本のような三、四階建の建物を想像していたら違いました。敷地はそれなりに広いのですが、一階建てのトタン屋根。ちよつと見ただけでは学校には見えません。

私たち一行十七人は、久しぶりの学校にわくわくどきどきしながら五年生の教室へ。

若いころバックパッカーで世界中を旅した友人から「ラテンの国へ行く時はテンションをあげて『オラ』と挨拶しなくちゃだめだよ。日本みたいにつむいてしずつ入らないこと。」というアドバイスをもらっていたので、皆で「オ

ラ」と思い切りハイテンションで挨拶。続けて、やつと覚えたスペイン語で挨拶「ブエノス デイアス。」

### 四十分の交流授業

日本から持っていった地図や写真を示しながら、私たちは地球の裏側の日本から来たこと、日本には四季があることなどを皆で紹介。子どもたちを見ると、全員白いシャツに紺のズボンのこぎつぱりした制服姿。なつかしい。五十年前の私が子どもだった頃みたい。でも、そこはラテンの国。みんなおしゃやれ。男の子は、髪の毛をキューピーさんのように盛り上げてジェルで固めてる。女の子も、髪をきれいにまとめ、ピアスも珍しくない。さすがです。

教室を見回すと、黒板は一度も塗り直した様子がないくらいは上げていました。机も粗末なつくりで落書きだらけ。日本だったら、即、廃棄になるようなものばかり。「教育に一番力を入れている」「国の予算の二割を教育費に充てている」というコスタリカですが、やはり全体の予算が少ないんですね。環境はまだまだでしたね。

池ヶ谷さんが、平和を進める国コスタリカへの共感と連帯を熱く語り始めました。日本で小学校の教師をしていたガイド兼通訳の五十嵐さんが分かりやすく訳してくれました。五十嵐さんを見つめる子どもたちの目が真剣でした。

日本からお土産に  
持っていった紙飛行  
機を飛ばし、紙鉄砲  
を鳴らす頃には、子  
どもたちの緊張も解  
けていました。こん  
な質問を受けました。

「あなたたちは何  
をしている人たち  
ですか。」

ごもつともです。さ  
ぞや不思議に思った  
ことでしょう。いき

なりたくさんの日本人がやってきて説明を始めたのですか  
ら。

「私たちは退職した教師です。」

と言ったら、やっと納得してもらえました。

小川さんのハーモニカの伴奏で「ふるさと」を歌い、次  
は藤井さんのピアノ伴奏で「幸せなら手をたたこう」。恥  
ずかしがっていましたが、肩をポンポンとたたいて交流。  
言葉は通じなくても楽しい時を過ごしました。

一クラスと交流するはずだったのに、なぜか急に五、六



年生の三クラスと交流することに変更になりました。  
あれ一つ、お土産が足りなくなっちゃう。

## コスタリカの教育

教室から一歩外に出ると、そこは廊下ではなく外です。  
ここは平均気温二十四度の常春の国。だから、通路には壁  
がなくオープンになっていました。

通路の横では、さまざまな観葉植物が大人の背丈ほどに  
立派に育っていました。ブーゲンビリアも屋根の上まで伸  
びて、ピンクの美しい花を枝いっぱい咲かせていました。

校長室から女性の校長先生ができました。作業着のよ  
うなラフな服装で私たちを案内してくれました。

入口近くの倉庫のような広い建物は食堂でした。この学  
校は三部制をとっていて、朝一番のグループは朝七時〜十  
時四十分。二番目のグループは十時四十分〜十四時四十分。  
そして、三番目のグループは十四時四十分〜十八時まで授  
業を行うそうです。それぞれ四十分の授業を四コマやるの  
だそうです。そして、どのグループも、朝食、昼食、おや  
つといった具合にどれか一食が学校で用意されるんだそう  
です。

将来の職業につながるミシンや刺繍を学ぶ部屋もありま  
した。

―学校以外の時間はどうやって過ごすのだろうか―そこが  
気になりました。

コスタリカでは、一、二年の就学前教育を終えた後、六  
年間の初等教育、三年間の前期中等教育を行い、この九年  
間が無償の義務教育になっているそうです。日本とほとん  
ど同じですね。

コスタリカは、憲法で『国内総生産の六％は教育費に充  
てる』と決められていて、その方針が貫かれているという  
ことでした。ちなみに国民の識字率は九五・五％で、アル  
ゼンチン、キューバと並び中南米の中では非常に高いんだ  
そうです。

そして、驚いたことには、義務教育にも落第があるのだ  
そうです。そういえば見学したクラスにもちよつと大きい  
子が結構たくさんいたような気がしました。成長の違いで  
はなくて、落第したのかもしれない。日本だったら、落  
第は一大事です。でも、この国では、到達すべきレベルに  
達することができなければ、学習をもう一度繰り返すのは  
当たり前と思っっているようです。

この学校は、隣国ニカラグアからの多くの難民を受け入  
れているそうです。見ただけではわかりませんでした。が、  
勉強どころではない生活を送ってきた子もいるのでしよう。  
そんな子どもたちも、このコスタリカの学校できちんと学

力をつけ、人間らしい生活の基礎を築いているのは幸せな  
ことです。

ノーベル賞受賞者のコスタリカ大統領、オスカル・アリ  
アス・サンチェス氏は  
言っています。

「未来をつくれるの  
は教育しかありません。  
子どもたち一人  
一人に教育を施さな  
いのは、その子ども  
たちを貧困へ向かわ  
せるもの以外の何も  
のでもありません。」

コスタリカはまだ発  
展途上にある国で、貧  
しいけれど、非武装中立、環境保全、教育重視を国の基本  
政策とし、政策実現のために熱心に発言し行動しているこ  
とに感動しました。

子どもたちが大事にされている国だと思いました。子ど  
もたちが大事にされている国は私たち旅行者にも居心地の  
良い国でした。旅行中どこへ行っても、子どもも若者も老



人も「オラ」と笑顔で挨拶してくれました。連泊したホテルでは、レストランのサービスマンが「日本語の挨拶を教えてください。」と声をかけてきて、翌日からは日本語で挨拶してくれました。この国にいる間中ずっと「ウエルカムな雰囲気」を感じました。

長時間見学させていただき、学校を去る時、私たちはお土産までいただきました。一人一バックずつの果物の詰め合わせです。帰りのバスの中で果物をいただいて乾いたものを潤しました。温かな心遣いが胸にしみました。

## コスタリカの平和教育

私たちは、平和教育というと、二度と戦争を起こしてはならないという立場から悲惨な戦争の体験を子どもたちに教える教育をイメージします。

でも、コスタリカの平和教育はニュアンスが違うようです。

例えば、算数の授業で「憲法小法廷に訴えた人が□人います。コスタリカの人口は□人です。訴えた人は人口の何%でしょう。」という問題が出たり、国語(スペイン語)や英語の教材として、平和にかかわる読み物を取り上げるといった具合に、あらゆる教科の中で日常的に平和を学んでいるんだそうです。そして、平和の三本柱として①内面の平和

②対人間の平和③自然との平和の三つを据えているそうです。「平和」の捉え方が幅広いんですね。自然との調和といった内容も「平和」の中に入るみたいです。平和が教育の基礎というか、平和が国の文化になっているんですね。すごいです。

そして、授業では討論を重視しているそうです。民主主義の第一歩は自分の意見をもつことだからです。誰もが主張しながら、それぞれに認め合う、平和の基礎は、多様な人間の尊重にあるとするこの国のまっとうさに、久しく忘れていた「教育とは何か」を、考えさせてくれた旅でした。